

第29回歴史学入門講座

歴史学の新たな地平を求めて—『自由民権期の社会』像の構築—

2013. 6. 23 大日方純夫

はじめに

I 歴史学との出会い—私の場合

(1) なぜ歴史を学ぶ(研究する)のか

- ①研究することの面白さ
 - 知的な好奇心—発見の喜び
 - 歴史の“消費者”から“生産者”へ—労苦と成果
- ②“生活の糧”としての歴史学
 - 職業(収入源)としての歴史研究・歴史教育
 - “労働”に対する給付
- ③歴史学の社会的責任
 - 学問的責任・市民的責任
 - 社会的現実との関係—課題意識・価値意識
 - 過去への問いかけ—過去との対話→未来への展望

(2) 研究するとはどういうことか

- ①研究に不可欠な2つの要素
 - 問題意識・方法・視角
 - 素材=史料
- ②研究者に求められる2つの資質
 - “設計家”(志) + “職人”(技)
 - 「職人的研究者」と「生活者的研究者」(遠山茂樹)
- ③問題意識と課題発見の経路
 - 課題発見をめぐる偶然性と必然性
 - 自己(主体)と外界(客体)との不断の相互作用
 - 外的契機の内面化→課題意識の獲得→対象への働きかけ→課題意識の深化

(3) 研究への私の道①—タテ糸をたぐる

- ①警察史研究の“発見”
 - 研究史的位置—「積み上げ」型の研究
 - 近代の総過程を通じての警察史研究—通史的研究(タテ糸)
- ②研究潮流のなかでの研究展開
 - 人民闘争史→国家史→社会史→地域史→

(4) 研究への私の道②—過去に光をあてる

①自由民権研究への道筋

研究史的位罫—「突き崩し」型の研究

自由民権期の政治構造・社会構造の解明（ヨコの広がり）

②「自由民権」への問い、「現在」への問い

中正派研究—「中道」勢力の動向

「自由民権百年」—「憲法の危機、教育の危機、軍国主義化の危機」

政党研究—運動の退潮と革新陣営の分裂

（権力と政党の関係、政党と政党の関係）

松方デフレと増税・軍拡路線—日本列島「不沈空母」化構想

対外認識・対外関係—国際化と「世界のなかの日本」

（5）歴史学の有効性と課題—何のために歴史学はあるのか

現在への問い、過去への問い、（未来への問い）

学問状況・研究状況への時代性の刻印

いかなる対象を選びとるのか

いかなる方法・視点で再現していくのか

過去とどう向き合うか

克服すべき過去と継承すべき過去

研究主体の価値基準

II 自由民権研究の推移—戦後史学史のなかで

（1）戦後の自由民権研究—その流れ

①第一の高揚期—敗戦～1950年代（前期）・60年代（後期）

「民主化」と民権研究

講座派（平野義太郎・服部之総）

鈴木安蔵—憲法研究

歴史学研究会大会（1955年）

堀江英一・大江志乃夫・大石嘉一郎・後藤靖の共同研究

近代日本最大の国民運動

段階的把握—士族民権・豪農民権・農村民権

西欧の市民革命との比較

→1960年代の研究展開

②第二の高揚期—1970年代後半～1980年代

地域研究の深化+民衆史研究の発展

自由民権百年運動（1981年～1984年～1987年）

現代的意義の確認

多様な個別研究の深化

基本史料集の整理・翻刻

記念館・資料館の開館

③自由民権運動像の変容—1980～90年代

“二項対立”批判—国家と運動の共通性・同質性

“闘う”民権からパフォーマンスする民権へ—言説・メディア・文化への傾斜

民権運動からの民衆運動の分離・独立—民衆運動の自律性

〈安在邦夫『自由民権運動への招待』吉田書店、2012年、参照〉

(2)「民権百年」をめぐる運動と研究

①「民権百年」における顕彰と検証

運動する「民権百年」

研究する「民権百年」

②複雑系としての「民権百年」

第2回「民権百年」全国集会をめぐる運動と研究

「民権百年」と民権研究

③転形期の民権研究—「民権百年」後

引き直される分割線

新しい「民権」研究の流れ

〈「自由民権」をめぐる運動と研究—顕彰と検証の間—『自由民権』17、2004.3〉

(3)自由民権研究の再構築—遠山史学から学ぶ

①世界史的条件と東アジアへの視線

欧米ブルジョア革命との比較—欧米の帝国主義化との関係

⇒敗北した（せざるを得なかった）運動としての自由民権運動

↓

世界史における自由民権運動

ブルジョア革命なき欧米（ドイツ・イタリア・ロシア等）との比較と関係

非欧米における運動との比較と関係

東アジア（中国・朝鮮・ベトナム等）における

西アジア（イスラム世界）における

東アジアにおける共同研究と相互交流

〈「遠山史学における「自由民権」の位置」『歴史学研究』2012.8〉

②複合革命としての自由民権運動

・フランス革命＝アリストクラート（貴族・高位聖職者）の革命＋ブルジョアの革命＋民衆（都市民衆）の革命＋農民の革命＝「性格の異なる四つの革命が複合的に組みあわされたもの」

・自由民権運動＝支配階級内部の反対派（下野参議、上級官僚開明派）の運動＋在野士族の運動＋豪農・豪商の運動＋貧農の運動＝「異なった性格の運動の複合」

「官僚専制に対抗する異なる階級・階層間の指導・同盟関係が成立したのが、自由民権運動の特色」

↓

自由民権運動と民衆との相関

運動史と民衆史

「国民国家」形成における自由民権運動の意味

〈「遠山史学における「自由民権」の位置」『歴史学研究』2012. 8〉

③自由民権の社会史へ

遠山茂樹「自由民権運動の歴史的意義」(1988. 3)

「自由民権運動といった場合に、自由民権政社だけを追っかけていたのでは、実際は自由民権運動はわからないんじゃないか。その裾野にありますこういった様々な生産・生活・娯楽という地域の動き、こういうものと結びつけて、或いはそういうものの土台の上に自由民権運動というのは成り立っているというふうに考えた方がいいと思うわけです。」

「新聞の役割」—「私がお願いしたいのは、先生方が新聞の中からある記事だけをピックアップして編集するのではなく、ある一日の新聞を丸ごとコピーして利用して欲しいということです。ドラマチックな事件が起きていない平凡な日の方がむしろいいわけです。そして政治面を担当する生徒、経済記事を担当する生徒、文化面を担当する生徒、社会面——自殺であるとか心中であるとか盗みだとかいろんなものが出てくるわけです——を担当する生徒に分けて、レポートさせる。(中略) こういう学習の上に、先ほど申しましたような自由民権運動の特色が理解できるんじゃないかと思うのです。」

〈「遠山史学における「自由民権」の位置」『歴史学研究』2012. 8〉

④自由民権運動といかに向き合うか

遠山茂樹「失われた自由の歴史」(1954. 2)

「自由民権運動がブルジョア民主主義運動として、どんなに不完全な不徹底なものであったかを指摘することは正しい。だがそれをいう歴史家が、当時の具体的条件の下で悪戦苦闘する主体と、おおよそかわりない立場から、いいかえれば今日の自由のたたかひの課題にたいする傍観者の立場からあげつらうにすぎぬならば、歴史の真実は全き姿をあらわさない。過去の屍の単なる堆積となって、歴史はわれわれのものとはなつてこないであろう。」

遠山茂樹「自由民権運動の歴史的意義」(1988. 3)

「なぜ自由民権運動はわずか数年間(中略)の生命でつぶれてしまったのか」

「今日、我々がそういう歴史から学ぶことがあるとすれば、どうしたらうまくやっていたかということではなくて、むしろそういう苦悩を苦悩として味わうことなんではないでしょうか。」

〈「遠山史学における「自由民権」の位置」『歴史学研究』2012. 8〉

(4) 自由民権運動をどう取り上げるか

①歴史的事実と価値意識

初心と志—国家へのスタンス

②自由民権期の世界史への関心—国際的視野

西欧との比較・関係
東アジアのなかで
西アジアとの比較

- ③自由民権期の社会像への関心
生活の構造、社会の裏面・底辺

Ⅲ 『自由民権期の社会』像の構築—執筆の意図と狙い

(1) 構成と構想

警察史・民権運動史・対外認識史・都市史⇒自由民権期の東京

- I 政治の季節（結社・新聞、「明治14年の政変」、政党）
都市民権派（都市結社）研究—官吏の位置
メディア史研究—新聞と運動の関係
政党史研究—期成同盟（自由党）系と都市民権（立憲改進黨）系の“分岐”
「14年の政変」研究—国家構想（憲法構想）の対抗
- II 近代化の強制装置（軍隊、警察、監獄）
近代国家の“強力装置”の解明
軍隊と都市の構造、徴兵制と学校・都市民権派
警察と都市秩序、交番と制服の意味—「姿を現す警察」
（国際比較—cf. 『近代ヨーロッパの探究 警察』ミネルヴァ書房）
警察機能と社会秩序—都市民権派の警察論（介入・干渉の意味）
監獄と近代国家
「監獄の時代」としての自由民権期—都市民権派の監獄論
- III 生活の構造（黄遵憲—生活、男女・親子、教育、産業、交通、墓地・火葬場）
日常生活（冠婚葬祭・女性）—“外”の眼から（黄遵憲の記録の活用）
ジェンダー史・家族史—男女関係・親子関係
学校と教育
産業化・都市化
博覧会研究・繁華街研究
社会生活と警察機能—営業警察（古着・古物）・交通警察
都市機能と交通—人力車と鉄道馬車
墓地と火葬場
都市構造との関係、国家政策（警察機能）の意味
“迷惑施設”と住民の関係
- IV 娯楽の空間（モース—光・音・臭い、公園・花見、芸能・演劇）

時代の“情景”と“空気”の復元
五感からの観察—“外”からの眼（モース日記の“活用”）
比較文化論的な接近—音楽感覚
娯楽
散歩と都市の景色—小野梓の例（小林清親の絵）
公園史研究—都市と公園、階層構造
娯楽・芸能と権力（警察機能）
演劇論—演劇改良運動と柳北・逍遙

V 社会の裏面と底辺（コレラ、火事、水害、貧困）
「コレラの時代」としての自由民権期
都市民権派の衛生論—干渉と自治の関係
衛生警察の展開
災害史からの接近
火災と都市構造—都市民権派の防火論
水害と社会構造—都市民権派の水害論と環境問題
貧困とスラム
松方デフレと都市構造
都市民権派とスラムクリアランス

VI 日本のなかの「世界」（視察・留学、御雇外国人、国家路線、トルコ・エジプト）
人の移動と知の交流
近代化と留学・視察の意味—都市民権派の位置
御雇外国人と都市—西洋とアジア（中国・朝鮮）
比較文化論的な接近—大隈重信とモース
日本のなかの「世界」
アジア（朝鮮）と日本
西欧（英米・ドイツ）と日本—近代化路線の選択
トルコ・エジプトと日本—国内的改革と対外的独立

（2）仕組みと仕掛け

- ①研究蓄積からの接近《都市史への総合》
自由民権運動史・警察史・対外認識史を都市・東京の上に重ねる
- ②現代的関心からの接近《歴史的現在への関心》
自由民権運動の時代—現代を直接に規定する過去（近代）が幕をあけた時代
時代の可能性、豊かさを探る
現代に投げかけるメッセージ（声）を聞き取る

③時代の構造化・重層化—民権研究批判《社会史からの深化》

政治・運動だけでなく、生活・娯楽・災害・国際関係などに目をひらく
政治の季節の社会の様子—時代の実像や空気に迫る
政治と社会・生活・文化—時代の重層化

④史料論的挑戦《史料論の拡大》

時間の流れのなかの出来事の重層化・複合化
空間のとらえ返し一点から、面へ、立体化へ
地図で個々の出来事を面に変え、絵で立体化させ、時代の空気を吹き込む
図像史料・地図史料

⑤人物研究からの接近《人物研究の複合化》

多くの人々を登場させて、その声を聞く—一耳をすます
主役は小野梓ら（成島柳北 etc.）
1872年9月発の船—井上毅・川路利良：河野敏鎌・沼間守一・成島柳北

⑥日本のなかの「世界」に着目する《「日本」の相対化》

外国人の目・感覚（モース・黄遵憲）
西アジアへの視線（トルコ・エジプト）
〈世界のなかの日本〉と〈日本のなかの「世界」〉
近代化と西欧モデル—交錯と対抗→近代化の検証
国際認識・国際交流
日本人から見た外国、外国人から見た日本
欧米（ex モース）とアジア（黄遵憲）
日本のなかのアメリカ人、アメリカ人が見た日本のなかの朝鮮人
民衆の朝鮮観

おわりに

研究における偶然性と必然性

〈引き寄せられる〉ことと、〈引き寄せる〉こと

“初心忘るべからず” —志の大切さ

なぜ研究をするのか

歴史への向き合い方—歴史学の座標軸を求めて

〈スタイル〉・〈ポジショナリティ〉か、〈格闘〉・〈立場性〉か